

会長 畑田 勇

平成 14 年も相変わらず不景気と不活発、不透明の内に過ぎました。さらに北朝鮮問題が発生しました。この泥沼から早く脱却したいものです。

3 月の畑田塾、7 月には子供達の写生会、10 月には、丹比小学校 3 年生 120 名が課外の総合学習のため見学にきました。床の間、違い棚、欄間、行燈、大黒柱、かまど、唐臼、自然石の古い灯籠、など大変興味深そうに熱心に観察していました。

最近、家屋構造や生活様式が変わってきたために、古来の建築様式や道具類などが大変珍しく見えるようです。「これは何をやるものか」「これは何の為に使うのか」「これは誰が作ったのか」など質問が次々に湧いてきました。

農機具や生活用具類の中には、中国から、特に唐の時代に渡来したものが数多くあります。簡単な道具であっても、よく考えてうまくできています。そして、今でも十分役に立つものがあることを話すと、深く感心していました。

少年達は人生経験は浅くても、五感を通して感知するすばらしい本能を持っています。時には、大人が想像もしなかったすばらしいヒラメキを見せることがあります。これらの素晴らしい感覚本能ヒラメキをピックアップし、育て発展させることは私共の重要な務めであると思います。

1. 第 3 回 畑田塾 2002 年 3 月 30、31 日
「富士山頂から星の誕生を見る」
東京大学助教授 山本 智
「対人地雷とカンボジア」
フォトジャーナリスト 小林正典
「楽しい考古学—発掘からわかる昔の生活」
はびきの市民大学 笠井敏光
「水に浮く焼物をつくろう」
薬学博士 畑田昭雄
2. 第 5 回 春の一般公開とフォーラム
「ギターで奏でる 19 世紀欧州のサロン音楽」
19 世紀ギター倶楽部 西浦崇文
3. 郡戸子供会の写生会 7 月 9 日
4. 放送大学大阪学習センター受講者の見学会
「アイリッシュハーブ独奏」 杉山朋子
9 月 7 日
5. 丹比小学校 3 年生(120 名)の総合学習、見学会
10 月 18 日
6. 第 6 回 秋の一般公開とフォーラム 11 月 17 日
「アフガニスタンの美術—文明の十字路の古代と現代」
大阪大学総合学術博物館長 肥塚 隆

登録有形文化財の動態保存

畑田 耕一

羽曳野市郡戸にある筆者の生家が平成 11 年登録有形文化財に登録されたのを機に、この建物の文化財としての価値を保持しつつ、これからも新しい文化を生み出し続けるための「活用」の計画として、羽曳野市と同教育委員会の支援・協力を得て「畑田塾」、一般公開ならびに文化フォーラムを開始して 3 年になる。幸い、活動を開始して半年あまり経った頃に、趣旨に賛同して下さる多くの方々のご理解とご努力で「畑田家住宅活用保存会」(会長 畑田 勇氏、平成 15 年 1 月 31 日現在、正会員 207 名特別会員 14 名)を結成することができて、活動が軌道に乗った。

「畑田塾」は、江戸時代からの文化・歴史を語りかける屋敷の中で、たとえ漠然とはあっても将来のことを考え始める小学校高学年から中学校、高校の生徒に、年報の事業報告欄に記したような、いろいろな分野の専門家との対話と学習を通して、将来の道を見つけるきっかけをつかんで貰うのが目的である。この年代の子供の教育には学校だけでなく親や保護者のつくりだす環境が大変大事であることを考えて、子供と一緒に参加を奨励している。毎年 3 月に 2 日間かけて行い、本年(平成 15 年)で 4 回目になる。

子供達は、たとえ 2 日間ではあっても、畳敷きの部屋でその道の専門家から親しくお話を聞いて、これまで知らなかった分野、考えてもみなかったことへの関心呼び起こされる。また実際に家の中を探検して、ここに暮らしてきた人々の生活様式や風習に思いを馳せ、自分達とは違う時代に生きた人々の文化を学び取っていく。このことは、年報に掲げた、参加者の感想文からも明瞭に読みとって頂けよう。

趣旨に賛同し応援に駆けつけてくださる方も多い。その中の一人大阪大学言語文化研究科博士課程の高馬京子さんの言葉をかりて「畑田塾」の意義と将来展望を伝えたい。

「中学、高校と受験を意識した勉強しかなかった私が「自分の道」をようやくみつけたのは、大学、就職を経て大学院に再入学した32歳の時でした。それだけに、受験とは関係なしに「学問」に小・中学生の時期から触れられるのは本当に意義深いことだと思います。先生方のお話は小・中学生にとって興味はあっても少々難しいかもしれません。しかし、そういう問題が存在することすら知らないことと、よくはわからないけれどそういう問題があることは知っていることの違いは、将来各自の進路決定の際に大きく影響すると思います。参加した子供、さらには大人も(私も含め)一緒になって、畑田塾が蒔いて下さった種を各自で今後育て、各々の花を咲かせていければと思います。」

一般公開には、いつも50名を越える参加者がある。年齢の層は広く、古い家や道具、風習への郷愁を覚えつつ昔の文化の良さを確認しておられる方もあれば、昔の風習・生活の工夫をいまの時代に生かしていこうという若い方も多い。筆者としては、これからもできるだけ広い層の方々にこの屋敷に接して頂き、建物の新しい魅力や個性を引出して、この畑田家住宅を美しく生かし続けることが出来ればと願っている。

一般公開の午後に行うフォーラムでは、いろいろと活発な意見交換があり、会の幕引きに困ることも多い。2000年11月12日の国際理解フォーラム「世界の人々と文化を語ろう」は、多文化共生の時代をどのように生きて行くべきかを考えることを一つの目的として開催した。アメリカ、ニュージーランド、韓国、台湾、中国、ルーマニア、コンゴ、カナダ、ドイツ、オーストリア、日本の計11ヶ国から70名が畑田家の八畳四間の田の字型スペースに集まり、多少混雑気味ではあったが、決して息苦しくはない開放的で温かい雰囲気の中で、会は進行した。外国の参加者は教師、留学生、大工さんなど日本在住の人達であり、日本の参加者は羽曳野市民のみならず、近畿一円、遠くは関東から来ていただいた方もあった。会では、日本を含めて8ヶ国の参加者からの食文化、住宅と文化、社会における男女の役割、少子化問題、教育制度、外国人の日本生活などについての5～10分間の話題提供に続いて、聴衆からの質問をまじえた討論が行われ、予定の2時間をはるかに越えても話のつきることがなく、続いて行われたお茶とお菓子の懇親会にも多くの参加者があり、会議中には出せなかった話題に花が咲き、筆者が終了をアナウンスすると「もう止めるのか」と言う声が飛び出すほどの盛況であった。

2001年11月11日の環境理解フォーラム「21世紀のエネルギーを考える」では、太陽光発電の第一人者で立命館大学副総長の浜川圭弘氏が「21世紀文明と新エネルギー」と題して、二次エネルギーである電気を起こす燃料の石炭、石油、原子力への移り変わり、エネルギーと経済ならびに環境との関連を分かりやすく説明し、環境破壊をせずに経済を活性化できるエネルギー源は太陽光しかないことを述べられた。太陽電池による発電も2005-10年には原子力発電とほぼ同じコストになる見通しという。次いで5年前から自宅で4キロワットの太陽電池を使っている畑田家住宅活用保存会長の畑田勇氏が、5年間の詳細な発電記録を基に、現在の太陽電池が羽曳野市周辺でどの程度の性能を発揮できるか、また、太陽電池を設置してから電気の節約に随分気を使うようになったことなど自身の生活ぶりを話された。その後、太陽電池の性能向上の見通し、電池の寿命と再生の可能性、廃棄した時の環境への影響、天候や地域と発電効率との関係などについて参加者全員による熱のこもった議論が続いた。三洋電機による太陽電池関連の展示もあり、筆者自作の風力オルゴールが太陽電池で回っている扇風機で一日中音楽を奏でるなど、有意義で楽しい一日であった。

平成13年5月27日の「オルゴールを楽しむ集い」には100名を超える参加希望者があり、2回に分けて実施することになった。古い木の家での、シリンダーオルゴール、ディスクオルゴール、ストリートオルガンとリードオルガンの演奏に筆者のオルゴールの歴史と科学の話を受けた1時間は参加者の心と体に強い響きを残したように思われた。特に、シリンダーオルゴールの繊細で音域の広い音色が、家中に広がるさまは、古い木の家の良さをあらためて実感させてくれた。オルゴールの音色そのものも、半分以上が箱の木で決まる。古い木ほどセルロース分子間の相互作用が強くなり、内部摩擦が少なくなる。これがアンティークオルゴールが良い音を出す理由の一つでもある。自然の木目の美しさや手触りが人の心にいろいろな働きかけをしてくれるのが木の家の良さの一つであり、またオルゴールの特徴でもある。当日の参加者はこのようなことを実感しつつ、オルゴールの音色を単に聴覚だけでなく、五感の全てを働かせて心と体で聞いて頂いたものと思う。

平成14年度フォーラムについては、本年報の記事を参照していただきたい。この4年間に約700名にのぼるいろいろな分野、年齢の方が畑田家を訪ねて頂いた。外国のお客様もかなりの数になる。皆それぞれに自分の持つ文化に、日本の伝統家屋のひとつ畑田家の担う文化を重ねつつ考えを述べていただく。

納屋をアトリエにして、義兄の画家中村貞夫氏が、自然をテーマに油彩画の大作を画き続けている。国費留学で来日したイギリス人の画家が畑田家住宅を訪ねた時、「日本人の多くは結果を急ぎすぎるが、中村氏の仕事はこの建物のようにゆったりしている」と指摘したそうである。「私の作品は畑田家住宅が生み出している」という氏の述懐を付記して筆を置く。(本稿は、「建築と社会」2002年6月号49～50ページに掲載されたものの内容を、日本建築協会の許可を得て一部改訂したものである。)

行事に参加していただいた方からの感想文

「さわやか文化を入れる器—動態保存に挑む畑田家住宅」

つい先ごろ通過した世紀末、私たちはハッと気がついた。青い空、清らかな水、落ち着いた構えの家、緑の野山はいつまで続いてくれるのだろうか、と。「21世紀は循環系社会にしよう。共生の心をもって」と叫ばれている。町々の光景が急変している。瓦屋根や土壁を残せという声があがってきた。本当は「壊すな、風情をなくすと心もなくなる」と思っているからだ。

戦前の由緒ある家屋など建造物を、登録文化財として保存する施策が行われているが、住まいながら保つ方法が望ましい。さらに建物は地域と住民生活の舞台であり、時代文化の象徴なのだから、文化の器として重宝したい。遺産を使いながら保つことを、動態保存という。世界各国のSLや寺院で行われ、生きていく精神、技術として感動を与えている。大阪の民家では、北に西尾家住宅（吹田）、南は畑田家住宅（羽曳野）が、成功している。

本年報に記されている畑田家住宅活用保存会の事業内容は、どこの大学、文化センターもうらやましがら、素晴らしいもので、夢の塾だ。畑田家住宅を公開しながら昼前後の数時間。父母と来た男女の児童生徒、会社員、主婦、ご隠居さんらが二間続きの広間に座って話や音楽を聞く。寺子屋かソロバン教室か、いや正月の客間を思わせる和やかな雰囲気。退屈する子供はいない。中座する主婦もいない。話の内容にひかれて瞳がキラキラしてくる。専門家の皆さんはお話上手。会費も出さないで、一日耳寄りな話や心地よい音色を楽しめるのは、もったいない気持ち。河内平野の真ん中、羽曳野にコンコンと湧くさわやかな泉がある。

榎野敏男（フリージャーナリスト）

第3回畑田塾

先生の話はとても面白かったけれど、この家に入って一番最初に思ったことは、この家を調査したいということでした。地雷の仕組みがわかって、嬉しかったです。考古学と土器づくりは、きょうな経験になりました。またこういうことがあればお知らせ下さい。岡本穂高（峰塚中2年）

うちゅうの話は、もりあがったけれど、言葉の意味がさっぱり分からなかった。でも地球がどうやって出来たか、人間が何故いるのかがわかった。二日目の午後粘土でコップを作った。焼くと水に浮かぶとうきになるらしい。おわりにオルゴールをもらった。たのしかった。

畑田吉英（丹比小3年）

じらいの話はおもしろかった。じらいの本を持ってきてせいかいだった。星の話はむつかしかった。やきものにきょうみがあるので、二日目はたのしかった。ペーパのおきものと、わにとコップを作った。家の二階にあがるはしごも、すこしのぼれるようになった。オルゴールもらえてうれしかった。こんなきかいがあったらまたきたい。

稲富桃子（高向小4年）

世界が大きく広がった感じです。星が生まれるということも知らず、夜空を見上げるとそこにあるものと思っていなかったのが、起源をたどれるなんて考えても見ませんでした。地雷の体験も聞かせていただけたし、今までなんとなくつまらないと思っていた考古学も、人間を深く知るための学問だと分かり、まだまだ、知らないこと、知りたいと思うことが自分にもいっぱいあるのだということが分かって、貴重な体験でした。陶器作りも子供の頃に戻ったように、楽しませていただきました。なんとなく心が豊かになったような気がしました。

稲富明子（稲富桃子さんのお母様）

久しぶりにいろいろなお話を聞かせていただき、ボケ始めていた頭も少し生きかえったように思いました。星の話

や考古学の話は別世界のことと考えて過ごしてきたのが、少しは身近なこととして捉えることが出たと思います。有難うございました。

稲富光世（稲富桃子さんのおばあさま）

私にとって、とても印象深かった話は、富士山頂の望遠鏡から宇宙を観察するという話です。以前から天文学には興味を持っていたので、楽しく聞くことができました。熱を持っているものはどんなものでも、光や電波などの波を出しているという話には、とても驚きでした。実際に見ることができるのは光のみなので、普段生活をしていても、他のものから波が出ているとは思いませんでした。望遠鏡の話に限らず、いろいろな話を聞くことによって、今までとは違った視点からものを見ることができるようになるので、積極的にそういう機会を持っていきたいと思えます。

また、研究は、自分が大学で専攻してきた分野で行うことが多いと思っていました。しかし、講師のお一人が大学では化学を専攻し、現在は天文学を研究して居られることを知って、そんな選択もあるんだなと思い、視野を広げることができました。また機会があれば、畑田塾に参加したいと思いました。

久米由香里（筑波大学1年）

畑田塾に参加したのは、ロータリー財団奨学生である私が、顧問である畑田先生にお世話になったのがきっかけです。中学、高校と受験を意識した勉強しかなかった私が「自分の道」をようやくみつけたのは、大学、就職を経て大学院に再入学した32歳の時でした。ゆえに、畑田先生が「受験対策ではなく将来の進路を見つけるための塾」と言われるように、受験とは関係ない「学問」に小・中学生という時期から触れられるのは本当に意義深いことだと思います。もしかすると、各々の講演は、興味深きながらも小・中学生にとって少々難しかったかもしれませんが、「そういう問題が存在することすら知らない」と「よくは分らないけれどそういう問題があることは知っている」との違いは、将来各自の進路決定の際に大きく影響すると思います。参加した子供、さらには大人（私も含め）も一緒に畑田塾が蒔いて下さった「種」を各自で今後育て、それぞれの花を咲かせていければと思います。

高馬京子（大阪大学言語文化研究科博士課程）

畑田先生には、私が府立高校に在職中研究会活動などで何かとご指導を頂いてきました。45年間の中学校・高等学校の理科教師を引退して時間のゆとりが出来て、やっと第三回畑田塾に参加させていただくことが出来ました。文化財の畑田家住宅という大変贅沢な教室で過ごす時間は、それだけでも貴重なことです。小学生・中学生そしてその親、私のような大人、参加者はさまざまですが、講師の先生方はきちんと学問の本質を押さえてお話し下さいます。子供達にとって、それが十分理解できなくても、素晴らしい講師の先生方に本物のお話を直接伺い、実験実習を指導していただけるということで、大きな物を得て帰ったに違いありません。子供達の知的好奇心を呼び覚まさなければなりません。あれこれ触らせなければなりません。本当の理科教育が、ともしれば、なおざりになっているかと思われるこのご時世に、何と素晴らしい塾でありますことか。子供達は目を輝かせていました。企画運営に大変なご苦労がとおありと拝察致しますが、畑田塾が益々発展しますよう感謝を込めて心からお祈りいたします。

緒方淳子（前金蘭会高等学校・中学校校長）

ギターで奏でる19世紀欧州のサロン音楽

日曜日の午後、畑田家にて行なわれた19世紀のギター演奏会に寄せて頂いた。1840年頃のギターと聞き、フランス関係の研究をしている私は、画家のアングルやドラクロワの時代を思い描いた。演奏者の西浦崇文さんが取り出したギターの美しさ。サウンドホールの周りには螺鈿装飾が施されており、それはまさに、これら画家の時代にぴった

りのものに思われた。また、演奏が始まったときの感動、澄んだ音色、そして、美しい高音と芯のある響き。私は音楽のことは門外漢ではあるが、その音色の美しさと心地よさ、まさに人間の心の琴線に触れるような美しさと現代の電子音楽には決して真似の出来ない心地よさに魅了された。西浦さんはギターの説明を丁寧にしてくださり、前半部の演奏曲の多くは、元々はリュートの為に作曲されたものであるということだった。これを聞いた私の頭の中には、時代は19世紀よりずっと前なのだが、大好きな16世紀のオランダの画家、フェルメールの作品、「窓辺でリュートを弾く女」が浮かんできた。19世紀にヨーロッパで演奏されていたギターが、今、こうして時空間を越え、日本の畑田家の伝統ある住居、その木のぬくもりとびったりと響きあっていることに感動を覚えながら、このような貴重な時間を過ごさせてもらったことに感謝で一杯であった。

石丸久美子 (大阪大学言語文化研究科博士課程)

ギターの音は、湿度など微妙な大気の状態に影響を受けるそうです。幸いにも、当日はすっきりとした青空が広がり、気持ちの良い一日となりました。「19世紀ギター」の音色のデリケートさには驚き、また大変興味を持ちました。19世紀前半に流行った「19世紀ギター」は、19世紀後半に生まれたクラシックギターに追われ、20世紀後半に見直されるようになるまで、衰退の一途を辿ったとのことでした。クラシックギターの音もすばらしいものですが、小ぶりで、固有の響きを持つ19世紀ギターの音色はとても印象深いものでした。弦も、ナイロンではなく羊腸でつくられており、ラの音も異なるそうです。この日は、しばしこのギター音楽に耳をかたむけ、たくさんの参加者の方々と、ゆったりとした休日を過ごせました。まさに、「年代を経た木の家、登録有形文化財の畑田邸で、年代を経たギターの演奏」を聞いた、19世紀欧州サロンの経験でした。

斎藤園子 (大阪大学言語文化研究科博士課程)

畑田家は江戸時代の庄屋の佇まいを残す広大な屋敷である。屋根が真新しい。「屋根の葺き替えに俸給一年分がかかった」と言う畑田先生のお話を伺い、保存に取り組まれている人達の苦勞が胸に迫る。高度成長期に、ただ古いと言うだけで昔の良いものが壊されていった。あれから何年経っただろうか。よく今日までこれだけの広い屋敷が壊されずに残っていたと思う。先生の保存に対する並々ならぬ熱意が伝わってくる。ギターの演奏も素晴らしかった。ギターとその音楽の、時代を追っての説明と素晴らしい演奏を、この目と、この耳で聞くことが出来たことにお礼を申し上げます。神埼かよ子 (大阪大学基礎工学部事務官)

This is one of the oldest Japanese traditional house I have ever seen. This house is full of old furnitures, which can demonstrate what was going on in the past century. The antique things and tools can tell you well the Japanese ancestors' way of life, how they spent a long happy lifetime with their family in past. It is a good place suit to learn the Japanese traditional history.

In addition, environment is suitable for resting since there is a lot of trees giving shade and fresh air, which make you feel freshly when you stay in this house. The small garden inside is also good for eye relaxing.

Classic guitar-songs were very impressive in this day. The melody and rhythms were smooth and very nice. Every song was played from heart. Even I don't know much about music, but this small concert made me felt happy and relaxed a whole time.

The combination of staying in traditional house with listening the classic guitar songs is the best wish for my free time!!

畑田家住宅はよく保存されており、意義深い見学でした。私も古い日本住宅に住んでいますが、今様の鉄筋住宅の生活にはない良さを今更のごとくに感じました。畑田教授とは40年ぶりの再会でしたが、終身雇用を前提とした民間会社からのご転進、ご成功は人の生き方を考えさせてくれました。杉山朋子さんのアイリッシュハープの演奏は、当日のハイライトでした。化学者と演奏家との両立、ただただ感服。ダブリンで聞きほれたこのハープの音色を、再び楽しませて頂きました。井口要三 (放送大学全科生)

木造の古い家が少なくなっていく昨今、このように大切に保存されていることに敬意を持ちました。私が幼少時を過ごした実家もおよそ一世紀を経た木造でしたが、今は新建材を使ったアルミサッシの家に建て変えられています。畑田家の柱、ふすま、板戸、へつついさん、五右衛門風呂など全てに毛穴の広がるような、やわらかい安堵感を持ちました。どうか大切な文化財としてお残し下さいますようお願いいたします。加えてハープの演奏で心に安らぎを与えていただき、本当にリフレッシュすることが出来ました。有難うございました。福井操 (放送大学全科生)

丹比小学校畑田家住宅見学会

10月18日に畑田家という家に行ってきました。家の中を見てもらって本当に古い家なんだなーと思いました。家は江戸時代からあるそうで、いろいろなものがいっぱいあった。家の庭は広くて、部屋もいっぱいありました。ちょっとでもいいから住んでみたい。昔の人は、いまみたいにねてたのかなーと思いました。

黒岡りさ (丹比小3年3組)

文化フォーラム—アフガニスタンの美術

秋庇 風のやさしさ 真上より

平成14年11月17日、羽曳野市郡戸の登録有形文化財「畑田家住宅」で詠んだ拙句です。

この日、一般公開と文化フォーラム(アフガニスタンの美術—文明の十字路の古代と現代—を課題に、語り部は大阪大学総合学術博物館長の肥塚 隆教授)が開催されました。文化財建家の大屋根の下、畳敷きの居間でフォーラムを開いて、伝統文化の香りを堪能し見識を磨くといった企ては、日本中探しても、「畑田家住宅」以外皆無ではないでしょうか。そして極端な話、居間のそこそこに寝転がって文化論を展開していても決しておかしくない様な、渾然として不思議な融和感が漂っているのも醍醐味の一つに違いありません。生きた教育。知的興味の喚起。討論の中での自己の確立。現今、希求され、叫ばれている「学ぶかたち」そのものの設定に、当主の畑田耕一さんの真骨頂を垣間見た思いで、感銘を覚えました。

三軒 齊 (姫路工業大学名誉教授)

大阪大学総合博物館長の肥塚先生から、アフガニスタン各地の芸術品に関するお話をうかがった。東から伝わった仏教芸術の中にも、ギリシャ、ローマなど西側世界の影響を受けている様子がよくわかった。当時、異種文化が融合された芸術が完成するためには、アフガニスタンのように東と西を結ぶ交易路上に位置する必要があるであろう。しかし、交通手段、情報網が発達した現代では、日本も文明の十字路に位置しているといえる。いま、アフガニスタンの芸術品は破壊が進んでいるが、先生のお話では、芸術品の保護に大切なことのひとつは、現地の人々の教育を充実させることだ。そう考えると、芸術品の創出のみならず、その保護および継承にも異文化の交流が大切になってくる。古くから大陸の文化を取り入れてきた我々日本人が世界の文化遺産のためにできることは、決して少なくなさそうだと感じた。

中川修 (奈良先端科学技術大学院大学研究員)

畑田家住宅との出会い

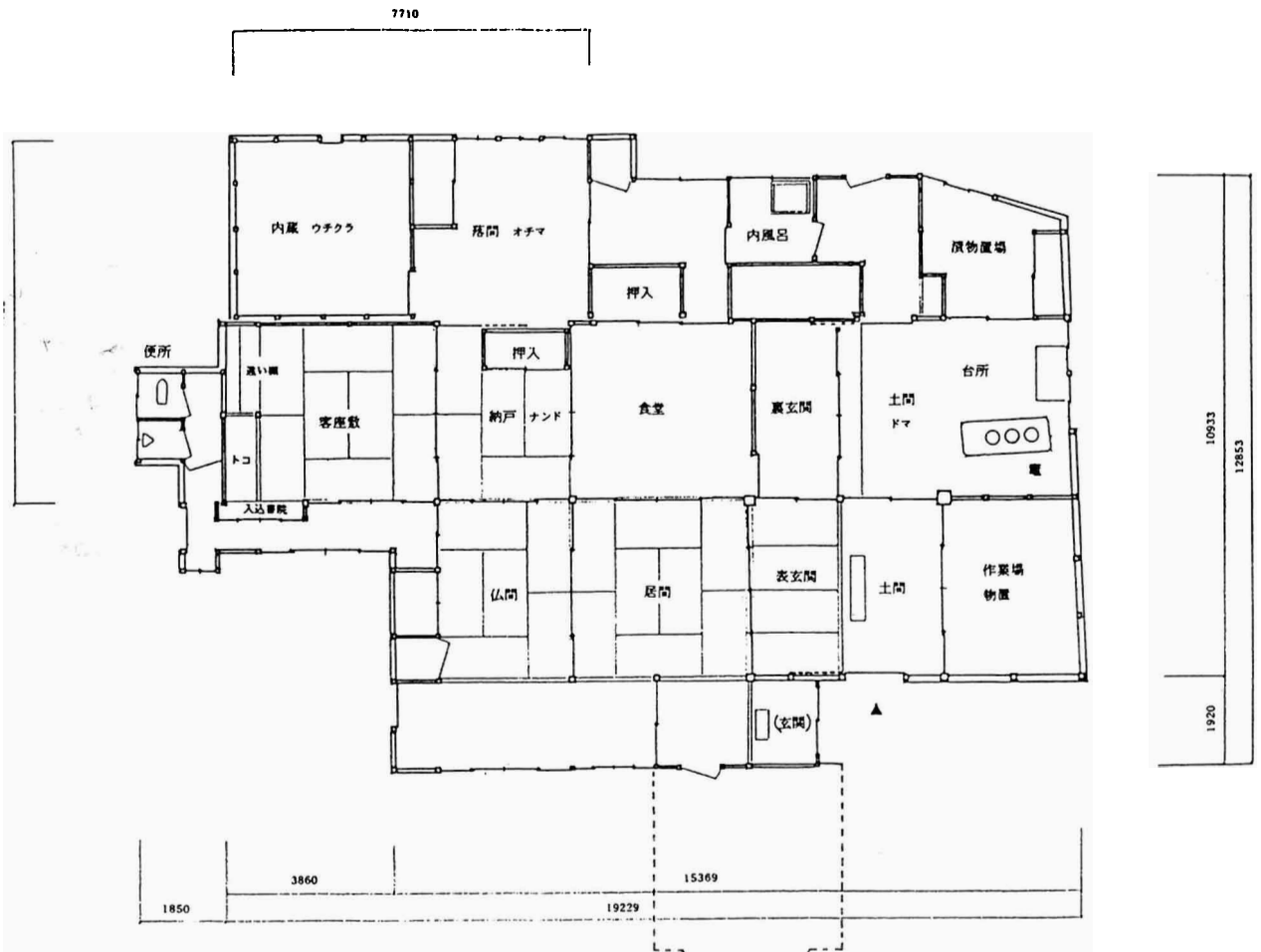
畑田家と私との出会いは、25年前に遡ります。父の建築設計事務所に入所して初めて担当になったのが、畑田家の納屋を中村貞夫画伯のアトリエに改装する仕事でした。現場になんども足を運び、母屋も見せていただく機会がありました。立派な梁と「つし」空間のおもしろさが印象に残りました。当時中村画伯ご一家は、この畑田家住宅にお住まいでした。つい4年前まで、住まいとして使われてきました。畑田家の一番の価値は歴史のある建物が、大きく手を加えられずにずっと住まれてきたことにあると考えています。

建物は、その家それぞれの歴史を伝えてくれます。建物の中に入ると、現在まで流れてきた時間の重さを感じることができます。自分の存在は、たくさんの先人達が生きてきた上に成り立っているということをお子供達にも感じさせる身近な題材です。たくさんの歴史のある建物が姿を消してしまいましたが、今あるものだけは、後世まで生き続けて欲しいと思います。

平成8年に、歴史的な建物がどんどん姿を消していくことに歯止めをかけるため、国の登録文化財制度ができました。ある時「土曜美の朝」というテレビ番組で、中村画伯のことが放映されました。その時に屋敷の様子が案内され、久しぶりに畑田家を思い出しました。そして登録文化財にぴったりだと思いました。さっそくその旨を中村画伯に伝え、建物を後世に残していきたいとお考えの畑田氏の了承を得て、登録文化財の手続きを進めました。畑田家住宅の良さを理解して大事にお住まいだった中村ご一家、歴史のある建物を人々の役に立てて活用し保存していきたいとお考えの畑田ご一家、登録手続などに惜しみなく努力をしてくださった羽曳野市教育委員会の笠井氏、全ての条件がうまく揃い、平成11年に国の登録有形文化財に登録されました。

現在たくさんの方々がこの畑田家を訪れてくださり、それぞれに何かを感じて下さっているようです。畑田家住宅活用保存会もでき、畑田家住宅を取り巻く人々の輪も広がりつつあります。多くの方々が歴史のある建物の大切さを実感してくださり、あちこちの地域で畑田家のような建物が生き続けて行って欲しいと願っています。

久米智子 (石井智子美建築設計事務所)



登録文化財 畑田家住宅	現況平面図	2002.03.30
	石井智子・美建築設計事務所	

畑田家住宅活用保存会 会員名簿 (五十音順)

正会員

赤井 操	甲斐 学	三軒 齊	新見 亮	堀川 明
浅井 俊哉	海田由里子	椎久 子	西浦 崇文	本郷いづみ
朝倉 敏影	笠井 健	塩谷 啓	西山 敏之	本郷 伸也
浅田 健史	笠井 敏光	島田 彌	野口 富男	前野 昌久
浅田 八重	檜山 雅治	清水 雄	萩原 淳生	増木 達也
朝日 薫	嘉納 邦子	下村 生	畑田 勇	増田 栄次
麻生 弘子	鎌田真理子	城野 弘	畑田 出穂	増田 ゆかり
安達 醇	鎌田 倫子	菅 徳	畑田 馨	松井 和子
安達 幸雄	蒲池 幹治	杉山 子	畑田 耕司	松尾 誠剛
天野 浩治	唐住美恵子	高嶋 弘	畑田 周作	松本 明子
天見 晴彦	河合 進輔	高松 夫	畑田 夕加子	真弓 忠範
筏 千恵	河合 康子	高松 子	畑田 拓男	真弓 昭子
石田 久	河内 岳大	高谷 光	畑田 達也	三浦 永司
稻富 光世	川橋 脩	武士 三	畑田 庸雄	皆川 雅朋
井畑 敏一	神崎かよ子	竹中 洋子	畑田 利夫	南野 成幸
上田 清	神崎道太郎	竹之内初子	畑田 豊彦	宮川 順夫
内本 晴夫	菊地 幸男	田中 克二	畑田 直樹	都 福仁
馬田あけみ	木代 茂樹	田中 正子	畑田のぶ子	宮田 幹二
梅村 吉弘	北 富美子	田中 裕子	畑田 正美	毛利 晴彦
浦上 政子	北濱 英子	田淵 雅人	畑田 稔	森尾 隆也
江村 智之	北本 靖子	多羅尾俊之	畑田 洋一	森ノ木徳信
大上美智子	北山 辰樹	田和 清美	畑田 美雄	八重 真治
大澤 永司	木下真由美	多和田眞盛	浜中佐和子	八島 栄次
大島 純治	喜来 義隆	多和田 誠	林 寿美	安田 平
大島 佳子	楠本 正一	近松 啓明	原田 紘一	矢野富美子
太田 敬子	久保 博孝	竹玄 賢司	日浦 好子	藪田 尚士
太田 浩二	久米 和男	塚本 昭光	疋田 勇	山根 通正
大槻 明子	久米 智子	塚本 誠	平井 諒子	山本 智
大西 愛	玄馬 恒夫	椿 和子	平沢 洋治	山本 正規
大西 公美	小池 正明	寺脇 義男	平野 朋広	山本真寿子
大沼 宏	小池 幸夫	土岐 元幸	平ノ上昭夫	山本 靖子
大橋 栄子	小池 渡	鳥井 英子	福岡 徹也	結城 嘉子
大林元太郎	小谷 雅延	中川 修	藤井 捷子	由良 裕子
大和田侑子	小宮山 徹	長倉 正昭	藤川 欣三	吉澤 則男
岡畑 誠治	近藤 芳史	長澤 香	藤澤 隆博	吉田 寿夫
岡本 露野	佐伯 吉捷	永田 和彦	藤澤 元子	吉田 絵里
岡本 佳男	阪野 功	中西 周次	藤田真規子	吉野 義照
男城 弘子	佐々木 隆	中西真恵美	藤田 操	吉村 安子
越智千恵子	佐藤 恵美	中村 貞夫	藤本 信貴	吉本 寛
小野 勝弘	澤田 秀雄	中村 俊夫	舟橋 広晃	渡瀬 勉
何 守鋼	澤村 福男	中村 弘規	古田 親次	渡辺 薫
			細川 隆弘	渡辺 和子

特別会員

石井 修	肥塚 隆	筒井 康隆	林 耕三	吉田 美香
糸魚川直祐	小林 正典	友國 裕弘	水野 博之	脇田 修
金森順次郎	桜井 敏雄	濱川 圭弘	山本 智	

あなたの町に素敵な文化の器

榎野 敏男 (フリージャーナリスト)

町中に、真夏でもひんやりとした空間があります。樹木が多く、古い家並みのあるところ。夕涼みをかねて展覧会や文芸、茶菓の会に訪れる市民に親しまれているのは、北摂は吹田・内本町にある「旧仙河御料庄屋屋敷」(国の重要文化財)です。およそ八年前から、四季それぞれに味のある庭、母屋、茶室で毎月のように文化の催しが行われています。

河内にも、春秋で年数回、子供たちの歓声が聞こえる大きな家があります。「畑田家住宅」(登録有形文化財、羽曳野市郡戸)で、家族連れが各界で活躍する方から、先端科学の話や名演奏を楽しんでいるのです。

ともに、江戸時代末期まで続いた庄屋建築を、明治に改築。二百年来の農耕生活、地域文化の舞台となり続け、今も市民活動の場となっています。

戦後復興の合言葉は「文化国家の建設」と「経済力で世界進出」でした。半世紀後、経済の世界進出をなし遂げた途端、心の崩壊を招き、市民の富は目減りし、消沈しています。「文化国家」の心棒、未だ建たず、です。

器量の大きな人でなければ、役所も会社も任せてはいけなかったのに、そうではない人に任せるところから順に、悪事が露見しました。食べ物を盛るには、器が要ります。文化も器がなければ保てません。人の器量は、その糧を載いてこそ、大きくなります。

値打ちのある建物を愛護するのは、先人の知恵が充満し

ているからなのです。歳月を越えて後世に伝えようとしている心と証(あかし=器)そのものといえましょう。だから、使いながら保全するのが最適です。SLなども機能を伝えるのが使命ですから、動態保存されています。吹田と羽曳野の屋敷も立派な例証なのです。しかし、悩みは深刻です。

文化財維持は、所有者が行うのですが、少子高齢化、預金利子がタダ同然の経済政策の打撃で、法人や個人には、文化財維持費がまかないきれなくなってきました。ではどうすればいいのでしょうか。

「国や市が所有する」「文化財愛護財団を設け無利子貸与する」「相続の際に現状のまま物件納税し、国が保存団体に貸す方法を実行する」ことが良いのでは。文化財を愛する事業は、民間活力に任せられた方が国、市が行うより効率的だと、だれでも知っています。

江戸後期からの伝統建築を市民文化交流の場として、公有・再生する試みが吹田・高浜で始まりました。市予算は三億円、建物の要所を保存しながら改修して来春披露する予定です。収穫米を舟に積み、神崎川を通じて出荷するための拠点だった珍しい庄屋の構造です。持ち主が寄付していました。

府下の都市では、市民の半数以上が他府県出身者です。皆さん、いま住む町の「文化の器」をお訪ねになっては、いかがでしょう。(「大阪春秋」第107号、平成14年6月19日発行6~7ページより許可を得て転載)

会計報告

収入の部

繰越金	1,554 円	(前年度繰越金)
会費	630,720 円	(正会員数 207名)
寄附金	60,000 円	(2口)
雑収入	41,000 円	(絵はがきほか)
合計	857,274 円	

支出の部

借料、損料	10,000	(机、椅子等)
講師謝礼	270,000	(6名)
アルバイト料	30,000	(テープ起し 他)
資料作成・印刷代	23,446	(資料、年報)
通信費	43,360	(振替手数料、郵送料)
事務費	212,816	(パソコン、プリンター 他)
雑費	53,811	(講師接待ほか)
繰越金	213,841	(次年度繰越、一部積立)
合計	857,274 円	

役員

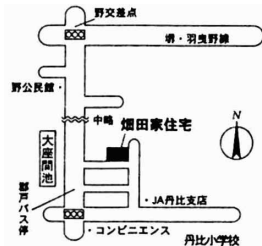
会長	畑田 勇
副会長	甲斐 学
	中村 貞夫
	畑田 拓男
幹事	笠井 敏光
	久米 智子
会計	畑田 庸雄
監査	澤田 秀雄
	塚本 昭光
顧問	畑田 耕一

編集後記

ことのほか寒い今年の冬です。郡戸の家々の庭や屋根に積雪が見られました。いつも、ご理解とお力添えを賜り有難うございます。年報 No. 2 をお届け致します。地味ですが着実な活動を今後とも続けたいと希っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。(S.N.)

表紙タイトルカット「主屋西壁」 中村貞夫

事務局 〒583-0874 大阪府羽曳野市郡戸 1-1 畑田 勇
TEL 0729-55-4380



- 畑田家へのご案内
- 近鉄南大阪線恵我ノ荘から南へ徒歩30分
 - 近鉄南大阪線河内松原あるいは藤井寺からタクシー10分
 - 近鉄南大阪線河内松原から近鉄バス平尾行き郡戸(こうず)下車徒歩3分
 - 吹田方面からは阪和道美原北出口より車で5分、和歌山方面からは美原南出口より車で15分